

# ONE LOVE 通信 36号

2008年1月20日発行

新年明けましておめでとうございます。昨年は一年間、ご支援いただき本当にありがとうございました。皆さまのおかげで、ブルンジにも義肢製作所を開くことができました。また静岡で行われた国際アビリンピック大会にも、出場することができました。今年もルワンダ・ブルンジのスタッフ、そして日本の人たちと共にごがんばりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



## 【タンガーニーカ湖の畔、ブルンジから】

9月25日、ブルンジオフィスがオープンしました。4月にブルンジ向けにコンテナを送ってからと言うものの、国境を股にかけ、行ったり来たり。準備で大わらわでした。

場所は首都ブジュンブラ。中心地からわずかです。ここに一軒家を借り、事務所・製作所そしてブルンジに滞在する際の住居として改造しました。裏庭にはたくさんのパパイアがあります。

ブルンジの政府は協力的で、パートナーシップを結ぶ契約にもサインが終わりました。ここから更に、経済的にも政府から支援を受けられるよう交渉を進めます。

こちらの人は式典が大好き。活動を知ってもらうためにも、手を抜くことはできません。さっそく段取りを決めていきます。式典を開くときは、必ず政府などからの要人を招き、最後にスピーチをしてもらいます。要人が複数来た場合は、一体誰がメインのゲストになるのか…。そんなことを話し合います。また式典では何を披露するのか。それ

も重要なポイントです。段取りが決まったら、次は招待状の作成。郵便の制度が発達していないので、手紙は一軒一軒自分たちで配っていきます。全部で150通ほど。ルワンダと違って、ブルンジの地図はまだ頭に入っていないので一苦労でした。

並行して、ブルンジの障害者15人分の義肢装具を製作。エマーブルとパトリックが奮闘しました。本来ならば、ブルンジですべて製作を済ませたいところですが、まだ十分な資機材がないのでルワンダに持って行って完成させました。ブルンジで靴を製作していた男性もスタッフとして働き始めます。製作が終わり、患者さんとおしゃべり。印象に残ったのは両足を失った男性。もう10年以上も車いすの生活が続いていたそうですが、義足を履いて立ち上がり、急に視野が高くなったことに驚いたようです。ずっとふるさとをあとにしていたので、故郷に戻りご両親と一緒に畑を耕したいとか。そのあとは結婚をして家族を作りたいそうです。



開所式にはたくさんの方が集まってくれました。政府・NGO等の組織の人々・ジャーナリストや友人たち。大統領府から来てくださった方にテープカットをしてもらい、いよいよオープンです。最初は事務の手続きの方法を見てもらいました。まだOA機器がそろっていないので、少々閑散としたオフィスですが…。それから義足の材料の入っている倉庫へ。日本から持ってきた材料や、日本の子供たちが集めてくれた中古の靴、そして安い値段で譲ってもらった車いす。いろいろなものがあります。



＜日本から運んできた車椅子＞

みんな興味深く一枚一枚見えています。義肢製作所ではエマーブルを先頭に（彼がブルンジオフィスの長です）、ルワンダから来た義肢装具士たちが待っています。訪れた人たちに義足の作り方を説明します。

ひととおり義肢製作所を見てもらったら、式典の開始です。ブルンジの太鼓でみんなを迎えました。頭の上に大きな太鼓を乗せて登場。力強い太鼓の音は、心臓に響きます。太鼓叩きの中には障害を持っている男性も含まれています。その彼が激しく踊っている姿を見て、みんなは大喜び。



＜頭の上に太鼓をのせるのが、ブルンジ流＞

そして寸劇。最近、こういった式典の中で寸劇をすることが流行っているよう。障害者がいかにワンラブで義足を手に入れられるかなどを、スタッフたちが演じます。セリフはあってないようなもの。普段の仕事そのままに演じています。しかしこっちは人は緊張をしないのかね？みんな堂々と、しかもうけを狙って笑わせています。

ガテラのスピーチも終わり、最後は大統領府から来た方のお言葉をいただき、開所式は無事終了しました。

ブルンジには障害者に義肢装具を配っている適当な場所がありません。今までは南アフリカから義肢装具士がやってきて義足の型を取り、それをわざわざ持ち帰り作っていたそうです。仮合わせをすることもないので、出来上がった義足が足に合わないこともしばしばあったらしい。また一部の障害者は政府の予算を使って、南アフリカやヨーロッパに義足を作りに行っていたそうですが、そんなチャン



＜出来上がった義足を披露。白衣を着ているのは、スタッフのセザール＞

スをつかめるのは、ごく一部の政府関係者のみ。一般の障害者が義足を手に入れることは、難しかったようです。またチャンスをつかめても、義足代や航空券・宿泊費、政府の負担も、かなり高いものだったことでしょう。これからワンラブがブルンジで義足を作れば、わざわざ遠いところまで行く必要がなくなります。政府が組んでいた予算も、もっとたくさんの

障害者に分けることができます。

現在私たちはブルンジ政府と交渉を続けています。義足にかかる費用の6割を政府が負担し、残りを自分たちで負担させてほしいということ。通信には何度も書いていることですが、NGOの力には限界があります。政府の協力なしに、活動を進めていくことはとても大変です。何とかブルンジ政府の協力が得られるよう、ガテラは今日も役所に足を運んでいます。

さてそんなブルンジですが、湖の畔にあり、魚が豊富。日本の煮干しにそっくりなダガーと呼ばれる淡水イワシを好んで食べます。油でちょっと炒めたものはそのままかじってもおいしく、カルシウムたっぷりです。ルワンダとブルンジの国境は、ダガーを運んだ車が通関の手続きをしていて生臭いです。

これからは日本とルワンダとブルンジを行ったり来たりする生活が待っています。忙しい日々が続くそうですが、カルシウムをたくさん取って、乗り切ろうと思います。どうぞ皆さん、応援してください。

## 【あっという間のアビリンピック】

もう一つのイベントは、第7回国際アビリンピックの参加です。ルワンダからはガテラと私、そしてアニエスおばさんが出場です。アニエスおばさんは女性の障害者の組織を立ち上げ運営をしています。だから責任感も強く、とても頼りになります。

ガテラと私は一足先に日本に来て、準備を進めます。そして彼女の来日のための資金集めも。新聞に載せてもらったり、人に声をかけたりして奮闘。しかしアビリンピックはまだあまり知られていないため、資金集めに一苦労しました。

予算が少なかったため、アニエスの旅程は強硬手段でした。11月12日早朝にルワンダを出発しナイロビへ。そこでピザを取ります。夕方には日本行きの飛行機に乗り、ドバイを経由し、羽田空港に到着。なんともまあ、ものすごい量の荷物です。到着が遅かったため、その日は家の近くのホテルへ。次の日の早朝、静岡に向けて新幹線に乗りました。静岡へはワンラブの縁の下の力持ちA子ちゃんも一緒です。しかし荷物の重さに四苦八苦。新幹線の中からは富士山も見え、先行きが良さそう。



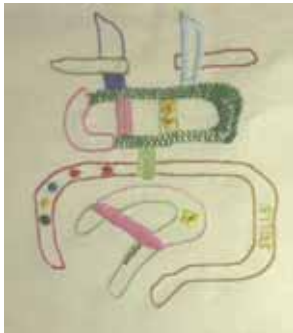


<ステージにあがるアニエスと真美>

到着後手続きを済ませて、開会式へ向かいます。たくさんの方からやってきた障害者と一緒にバスに乗り込みました。開会式はアニエスおばさんと私が行進をします。ガテラはルワンダ団の団長と言うことでVIP席へ。「ルワンダ！」と呼ばれてステージに上がります。アニエスは動じることなく、持っていた杖を上に掲げ、出場の喜びを表します。しかしVIP席に座っていたと思っていたガテラははぐれてしまい、違う会場で行われていた「技能五輪」の選手たちを見つめていたそう…。そしてその間A子ちゃんは大会の間に行われる展示ブースの飾り付けをひたすら手伝ってくれていました。ここでアニエスの団体の作った作品や、私たちの持っているルワンダの民芸品の展示販売を行います。

開会式は皇太子さまもご出席され、テレビで拝見した通りのおだやかな微笑みを見せてくださいました。

休む間もなく、次の日はアニエスおばさんの試合です。



<アニエスの作品>

刺繍に出場します。選手は中国・インド・パキスタン・スロバキアなどから全部で15名。6時間の間に「夢」と言う漢字を自由に刺繍します。会場はしんと静まり返っています。試合中の華やかさと言うものはありません。でもだからなおさら緊張感

が伝わってきます。何と、皇太子

さまも試合を見に来てくださいました！アニエスの席は通路側の一番目立つところ。きっと彼女の試合の様子も見てくださったことでしょう。当日は在日ルワンダ大使も駆けつけてくださいました。お昼休憩にはA子ちゃんが飾り付けてくれた展示

ブースに大使を連れてきて、自分の作品をアピールします。しまいには熱が入り、お昼御飯はいらぬなどと言う始末…。



<競技中のアニエス>

そして午後も試合は続き、長い一日が終わりました。

次の日の結果発表。残念ながらアニエスおばさんは入賞することができませんでした。でも試合を通じて知り合った人たちと交流を深めます。またガテラと一緒に他の試合を見たり、展示のブースを眺めたり…。

日本に着いてからアニエスおばさんは3回転んでしまいました。そして腰を痛めてしまい、車いすを利用していました。杖をついて歩いているよりも、スピードが速くなったからでしょうか、精力的に動き回っています。でも最終日にはどうしても腰の痛みが治まらないので、救急車(!)に乗って病院へ。幸い大事には至りませんでした。本人は「体重が重いから転んじゃうのよね～」と言っていた…。

アニエスおばさんのカバンに入っていた大量の荷物は、彼女たちが作った刺繍や民芸品でした。日本で売りさばこうと張り切って持ってきました。A子ちゃんはそれらを売



<ルワンダブースの前で記念撮影>

ろうと必死。見てくれる人に丁寧に説明をします。そしてその甲斐あって、何と30万円近くの売り上げがありました。この売上げはすべて彼女に渡し、団体の運営

資金にしてもらいました。彼女が何カ月もかけて刺繍した布(ゴリラの図案)は、一緒に競技を戦った日本の女性が買ってくれました。ありがとー！

閉会式の次の日、アニエスはルワンダへ戻りました。日本のことをもっと見てもらいたかったな。多くのルワンダの人が日本食に抵抗を示す中、彼女はお箸を使いながら、何でも挑戦していました。この挑戦する力があるから、ルワンダでも障害者の組織を切り盛りしていけるのでしょう。

アビリンピックを終えて、ガテラと一緒に考えました。この大会は非常に意味があるということ。障害のある人たちが、生きていくために必要な技術を競い合う。彼らの本当のパワーを見せる大切な大会だったと思います。残念ながら、日本そして世界でもまだアビリンピックの存在はあまり知られていません。参加する国もアジアが中心で、これからもっとこの大会のことを伝えていく必要があると思います。

今回ワンラブは、2000年のパラリンピックに初めて出場した時のように、ルワンダからのバックアップはありませんでした。そしてアビリンピック委員会のメンバーにもなっていなかったのですが、大会中に会議があり、委員会からメンバーとして承認されました。これをきっかけに、もっとルワンダ政府にもアピールをして、この大会に目を向けてもらいたいと思います。そして2011年に韓国で開かれるアビリンピック大会にも、またルワンダから選手を参加させたいと思います。



# 今号の患者さん

今号も昔の患者さん。ワンラブで初めて義手を作った少年です。

名前はパトリス。年齢は自称10歳。施設で暮らしています。開所して間もない頃、イギリス人の女性から、ある少年の義手を作ってほしいと依頼。費用は彼女が持つので、良いものを作ってほしいということでした。

施設の人に連れられてやってきたその少年は両腕がありませんでした。だから食事をする時も、動物のようにお皿に直接口をつけて食べているようです。その少年が腕をなくした理由は、悲しいものでした。



少年のお父さんは貧しく、人のものを盗ることを生業としていたそうです。ある日少年は友だちにそのことを話してしまいました。それを聞いて怒ったお父さんは、お仕置きをするために、何と！自分の息子の手を切り落としてしまったと言うことです！信じ難い話です。両腕を失った少年は施設に引き取られ、他の子供たちと生活をしていました。その時にイギリス人の女性と知り合

ったようです。



## ディアネ in Japan

ワンラブの義肢装具士、ディアネが神奈川県の海外技術研修員として8月に来日しました。前号に引き続き、日本での様子をお伝えします。

9月末に日本語の研修を終えたディアネは、現在横浜の義肢製作所で勉強をしています。日本滞在の半分が終わってしまいましたが、泣き言を言うような電話は一切かかってきません。さて、そんなディアネの様子を見に、横浜までガテラと二人で行ってきました。

久しぶりのディアネは、髪型を変え、ちょっぴり幼く見えました。親方に呼ばれて、汚れたエプロン姿で登場するディアネ。たどたどしいながらも日本語で挨拶してくれました。やはり日本は寒いのかな？結構厚着をしています。

親方に彼女の勉強ぶりを聞きました。かなりがんばり屋のようです。しかも負けず嫌い。納得がいけないことがあると、食ってかかるらしい！あるいは日本語がわからない振りをするらしい！でも親方からの評判はまずまずのようです。一安心。

前の3人の研修員には、義足や装具の作り方を中心に教えていたようですが、今回は女性と言うこともあって、縫い物も積極的に教えてくれているようです。それはコルセットと呼ばれる、腰の悪い人に装着するものです。私も7月に腰を痛めてから、時々身につけています。

ワンラブ初めての義手の材料は、ドイツから取り寄せられました。今回作る義手は、飾りとしての手ではなく、物をつかんだりすることができる手です。調整を間違えると、うまく機能しません。当時はまだ義肢装具士も3人しかおらず、みんな研究をしながら製作を進めています。

義手を怖々つけてみる少年。肩の動きを利用して、指先



を開く練習をします。うまくできるようになれば、スプーンを持つ事も可能です。これでお皿から直接食べなくて済むことでしょう。

その後少年は施設に戻り、義手を使いながら、みんなと暮らしていたということです。

何年か後、12月の障害者の式典に参加したとき、彼の姿を見かけました。少年は成長し、大人になりかけていました。その時作った義手はすでに小さくなり、もうつけていませんでした。

あの時のイギリスの女性は、継続して彼に義手をプレゼントすることができなかったようです。残念なことだけれど、これも現実です。

義肢装具は消耗品。いつか壊れてしまいます。また一度失った手足を取り戻すことはできません。それらの障害者のために、継続的な支援が必要であると痛感した義手作りでした。

コルセットは出来合いのものも売っていますが、やはり自分のサイズに合わせて作ったものが一番好ましいと言う事で、採寸の仕方、型紙の取り方、そして縫い方を勉強しています。

ある日のこと、親方が彼女を試すために、わざと間違えて型紙の計算をしました。そしたら！彼女はその間違いに気づいたそうです！う～ん、ディアネ、すごいぞ！

ルワンダにも腰を痛めている人がたくさんいます。その人たちのために、コルセットができるようになれば、ワンラブも評判になるに違いありません。今、彼女はコルセットを作るために、どんな道具や材料が必要になるか、リストアップしています。彼女がルワンダに戻る前に、それらを手に入れることができれば、コルセットをディアネスペシャルとして前面に出すことができます！

そんな彼女、日本でもたくさん友だちができたようで、携帯電話でしばしばやりとりしているようです。休日も結構忙しそう。義肢製作所でも、みんながお昼ご飯を分けてくれたりして、愛されている彼女。残された研修の日々、しっかり勉強し、しっかり日本を見るよ！と伝え、私たちは義肢製作所をあとにしたのであります。



# ボラテア 森上さん in ルワンダ



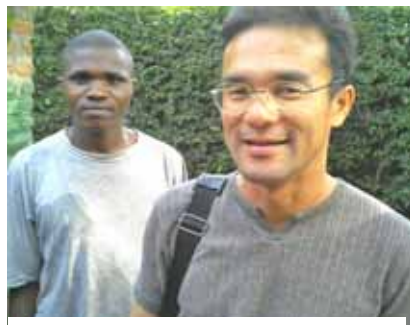
10 年程前、青年海外協力隊員としてソロモン諸島国（地図で探してね）に行っていたことがあります。今回はソロモンと比較しながらルワンダを紹介します。

初めてルワンダに来たとき、首都キガリの大きさ（広がり具合）に驚きました。ここは丘が多く、夜だったので家々の灯りがずーっと見渡せて想像以上に大きいなあと考えたものです。日本でいえば小さな町ですが、ソロモンの首都は日本では村。なにせ豪華客船が入港したときには国で一番高い建造物となり、見物に人だかりができました。



<ルワンダの町並み>

どちらも緑豊かな国ですが、ルワンダはどこに行っても丘（山）のてっぺんまで耕されています。



<ルワンダにいる森上さん>

ルワンダ人はソロモン人よりずっと勤勉だと思います。田舎に行けば、畑を耕している人をよく見かけるし、道ばたのちょっとした

空き地も耕されたりしています。ソロモンでは「ここが俺の畑だ」といわれても雑草が生い茂っていて「えー？あ、ほんとだ、サツマイモの葉っぱがある」ってぐらいほったらかしの畑でした。この勤勉さが今のルワンダの発展を支えている一因だと思います。

ここは虫が少ないのにも驚きました。ソロモンでは夜、窓にカブトムシやら大きな蛾、10cmもあるカミキリがやってきたり、昼は蝶やトンボがわんさか。蚊や蠅にもずいぶん悩まされましたが、ここは蚊や蠅もたいしたことなく、蝶も少ないし、灯りに寄ってくる虫も日本より少ないのです。でも、なぜか鳥は色とりどりの鳥がいて（ワンラブの近くでたくさんの種類が見られますよ）何を食べてるのか疑問です。

すごく離れているのにもおもしろい共通点もあります。人（特にタクシーなど）を呼ぶときに、「スッ！」と呼ぶのです。1万 km 以上離れた国でこの共通点はなんだか笑えました。そして子どもたちのかわいらしさ。これは世界共通なのかな。でも、言葉で表現しにくいのですが、純真さをこの2つの国の子どもたちからは強く感じるのです。



## ルワンダ事務所代表ガテラより

### これからも支援は続く… ガテラが考えていること

どうしてこんなに時間が経つのは早いのだろう。この間2007年の新年を迎えたばかりのような気がするのになんともう2008年だ！

思えば去年は常に国境をまたいでいた。ブルンジに義肢製作所を開くため、飛行機でブルンジに行った。でも航空券代がもったいないから、そのうち公共のバスを使ってブルンジに行った。さらに荷物を大量に持って行きたいから、自分で車を運転してブルンジに行った。うーん、何回ルワンダとブルンジの国境を行ったり来たりしたのだろう。それからコンテナを取りに行くために、タンザニアにも行った。そうそう、もちろん日本にも行った。落ち着かない一年だった。でもたくさんの事ができた。1994年の大虐殺が起こる前に私はしばらくブルンジに住んでいた。何年かぶりに訪れたその国を、ついついルワンダと比べてしまう。大虐殺から14年。ルワンダはめまぐるしい発展を遂げている。不便だったあの頃の生活も、今はずいぶん改善されている。何よりも、水道の蛇口をひねると水が出るという生活は、とてもありがたい。それもこれも、ルワンダの政府や国民ががんばってきたからだと思う。

しかしブルンジはまだ問題が山積み。自分たちが義肢製作所として借りているところは、水道も電気もあるが、インターネットの接続はまだである。今、ルワンダで仕事が進んでいるのも、この通信手段が発達したおかげである。

ブルンジではインターネットカフェを利用し、連絡を取り合っているが、これがまた思うように行かない。

障害者の生活も問題がたくさんある。何よりも、義足を作る適当な場所がないというのが辛い。彼らは歩くことがままならないから、自立の手段をたくさん逃してしまっている。そして今も紛争が所々で続いていることから、これからも障害を負う人の数は増えてしまうに違いない。2007年は、そんなブルンジに行くことができた。以前住んでいた町に行く、しかもそこで仕事ができるというのは嬉しいことである。

今年はどんな年になるだろう？去年のように行ったり来たりの生活が続くのだろうか？それもまた、良いかもしれない。自分たちがそうすることによって、私と同じように障害を持つ人たちの生活が改善できるのなら。

日本の皆さん、今年の抱負は何ですか？私の抱負は、ワンラブがこれからも続いていくように、そして障害者が前進していけますように言うことです。この思いは、来年も再来年も同じであると思います。どうぞ、皆さまも平和な毎日が過ごせますように。そして今年もワンラブを応援してください。よろしくお願いします。



# 日本事務所より

## 【アビリンピック出場へのご寄付

ありがとうございました】

ワンラブ通信・新聞等を読んで、沢山の皆さまが、アビリンピック出場のため、ご寄付をお寄せくださいました。前回のワンラブ通信発送日から、アビリンピック閉会までの間に、届いた寄付は下記の通りです。

10月1日～11月18日

アビリンピックと明記してあったもの

181,500円

通常の寄付・会費 1,569,943円

アビリンピック参加費用については、通常の寄付・会費より補てんしました。結果、ちょっとお財布の中身は、苦しくなりましたが、それ以上に得るものが多かったと思っています。応援してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

## 【書き損じハガキ集めてます！！】

お正月も過ぎ、書き損じハガキの季節です。皆さまのお家にある書き損じハガキお送りください。前回の呼びかけには、なんと882枚が集まりました！お友だちに声をかけてくださったり、本当にありがとうございます。通信費節約にとっても役立っています。送り先は、下記茅ヶ崎事務所まで、どうぞよろしく願いいたします。

9月1日～12月31日までに届いたもの

書き損じハガキ・未使用ハガキ 882枚

未使用切手 39,353円分

未使用テレホンカード 107枚

合計約 112,956円分

誤って届いた使用済み切手等につきましては、他団体へ寄付させていただきます。ご了承ください。

## 【イベント無事終了しました】

10月に、日比谷グローバルフェスタ、横浜国際フェスタという二つのイベントに参加しました。特に、日比谷で販売した、マンダジ（揚げドーナツ）とルワンダコーヒーは、2日間連続の完売になり、嬉しい限り。また、「ワンラブ通信を見て来ました」と言ってくださった方、中には、ワンラブオリジナルTシャツを着て来てくださった方も！皆さま本当にありがとうございます。またイベント参加の際にはお知らせさせていただきまますので、ぜひぜひご参加ください！



<横浜国際フェスタにて真ん中はディアネ>

## 【なんとかブログ続けています。】

6月からスタートした、ブログ「ワンラブ ルワンダ日記」。週に1～3回の更新ながら、続いています。ワンラブ通信ではなかなかお伝えできない、ワンラブやルワンダのこぼれ話を載せています。ぜひご覧ください。

また、1月よりイーココロ！というサイトにクリック募金の対象になるNGOとして登録されました。クリックをしたり、お買物をするにより、企業がみなさんの代わりにNGOに寄付をしてくれるというもの。イーココロ！会員になり、ワンラブを支援してください。登録はもちろん無料！詳しくは、ワンラブのブログまたはイーココロサイトをご覧ください。「よくインターネットを使うわ」という方はご参加を、「コンピューターはさっぱり！」という方は、お知り合いの方にお知らせして下さい！



ワンラブ ルワンダ日記

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

イーココロサイトはこちら

<http://www.ekokoro.jp/>

## 【カラーで印刷しました。】

いつも出来上がる通信をみて、やっぱりカラーがいいなあと思い続け、今回ついに実現。色々検討しましたが、事務所で印刷することに…。4日かけひたすら印刷。まさに貧乏暇なし。活動の内容が、みなさんに良く伝わりますように…。

## 【おことわり】

\* 発送作業の都合上、振込用紙を必ず同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

\* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南6-6-69 : 080-6564-4448 FAX: 0467-86-2092

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 36号 2008年1月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info>

